

# 2014年度自己点検・評価報告書(シート)

## 【目標の進捗状況(達成度)評価・報告】(最終年度)

### 《大学》

担当(記述)部局は、 ☆印の箇所を記入してください。

#### I. 評価項目・要素と担当部局

本報告書(シート)の自己点検・評価項目・要素と担当部局は次のとおりである。

対象部局	経済学研究科
大項目	6 教育内容・方法・成果 (研究科)
中項目	6.4 成果
小項目	6.4.1 教育目標に沿った成果が上がっているか。
要素	学生の学習成果を測定するための評価指標の開発とその適用 学生の自己評価、卒業後の評価(就職先の評価、卒業生評価)
小項目	6.4.2 学位授与(卒業・修了判定)は適切に行われているか。
要素	学位授与基準、学位授与手続きの適切性 学位審査および修了認定の客観性・厳格性を確保する方策(院)(専門)

#### II. 目標の進捗状況(達成度)評価と報告【2014.4.30現在】

##### 《進捗状況(達成度)評価》

本項目において、2009年度～2013年度の中期的な「目標」と「指標」を次のとおり設定し、毎年度進捗状況(達成度)の自己評価を行っている。進捗状況(達成度)評価は、目標の2014年4月30日現在における進捗状況(達成度)の評価(2013年度1年間の活動評価ではなく、2014年4月30日現在で目標がどこまで進んだかの評価)であり、A、B、C、Dの4段階で行ったものである。A、B、C、D評価の基準は目安として次のようなものである。

- A : 目標実現のための計画や方策などを適切に実行し、目標を達成している。もしくはほぼ達成している。
- B : 目標実現のための計画や方策などを概ね適切に実行しているが、まだ目標は達成していない。
- C : 目標実現のための計画や方策などを実行しているが十分ではなく、目標は達成していない。達成にはまだしばらく時間がかかる。
- D : 目標実現のための計画や方策などを実行していない。当然目標は達成していない。

2009年度に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗状況(達成度)評価				
		2009	2010	2011	2012	2013
1. 講義と試験により、成績評価の客観化を促す。	→試験素点数、学部生と院生の成績、修了者の大学教員・研究職・高度専門職への就職者数。	C	C	C	C	C
2. 査読つき専門雑誌への投稿促進のため、複数教員による集団指導体制の強化により計画的に研究指導する体制を確保する。	→研究科のディスカッションペーパーへの院生の投稿数、査読つき専門雑誌への院生の投稿論文数。	C	C	C	C	B
3. 博士課程後期課程修了時の課程博士授与者を増やす。	→入学後5年間での課程博士号取得者数。	C	C	B	B	B
4. 日本学術振興会特別研究員(DC, PD)の申請者を増やし、採用者を毎年1名以上を確保する。	→日本学術振興会特別研究員(DC, PD)の申請者数、採用数。	C	B	B	B	B

☆

2010年度以降に設定した「目標」	左記目標の「指標」	2009	2010	2011	2012	2013
	→					
	→					

##### 《進捗状況(達成度)報告》 担当(記述)部局は「指標」に基づいた報告をしてください。

上記で自己評価した目標の進捗状況(達成度)について、次のとおり説明・報告する。

目標1	C	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 大学院の中核となるコア科目は8単位必修とし、講義とそれに基づく試験により成績は客観的に評価されている。また、大学院教育委員会での検討により、2013年度よりコア科目をスタンダード・コアとリサーチ・コアに分類し、履修者の目的により即した授業の提供を推進した。コア科目の評価方法は定期試験もしくは授業中試験に設定している。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か コア科目をスタンダード・コアとリサーチ・コアに分けたことで、各履修者の目的によりマッチした授業内容が提供できている。修了者数は年度により大きく異なり、成績と進路の関係は必ずしも明確でない。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か コア科目指導教員による試験科目による評価を継続してデータ蓄積し、終了者の進路との関係を探る。	☆
		その他	☆

目標2	B	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 研究科委員会において集団指導体制として共同演習を開講し、研究科委員会にて春学期、秋学期と履修者報告を行い促進している。大学院生のディスカッションペーパー投稿については指導教員の推薦状を添付することにより可能となっている。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 2012年度において共同演習開講者は4名(前期課程生)で、2013年度は2名(後期課程生)であった。ディスカッションペーパーの投稿については、指導教員とともに編集委員の校閲制度もあり、論文精度が高まったと考えられる。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 共同演習制度の継続と、後期課程生への指導教員によるディスカッションペーパーへの投稿促進。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆
目標3	B	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 大学院教育委員会において博士課程プロセスを検討し、2009年度より「博士学位取得プロセス」を作成し研究科委員会で承認された。以後、履修心得にも掲載し、指導教員はプロセスに従い指導を行った。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 学位取得プロセスにより課程修了と同時に、学位を取得したものは現在までの対象者4名のうち1名(2009年度)であった。また1名は2年以内に学位を取得できた。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 博士課程前期課程より本研究科入学による一貫指導体制をとるため、研究者養成コースの検討。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆
目標4	B	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 奨励奨学金などの学内募集についても学術振興会DC、PDIに応募していることを条件とするなどして全学的に促進してきた。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 2010年4月よりDC2に採用1名、2014年4月よりDC2に1名の計2名が採用された。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 後期課程生はすべて学術振興会DCに出願するよう、指導教員からの指導を継続する。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆
備考			☆